

■あなたの袖は、右？左？

“横穴系埋葬施設”

西都原古墳群でいえば4号地下式横穴墓、鬼の窟古墳、酒元の上横穴墓など、遺体を埋葬する「玄室」へ横方向から入るものを考古学研究者はこう呼んでいる。

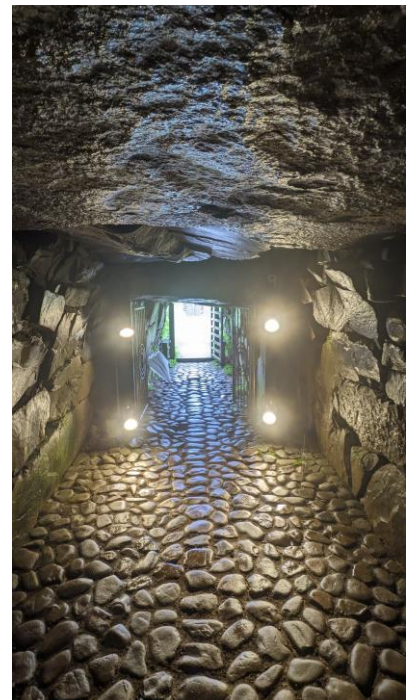
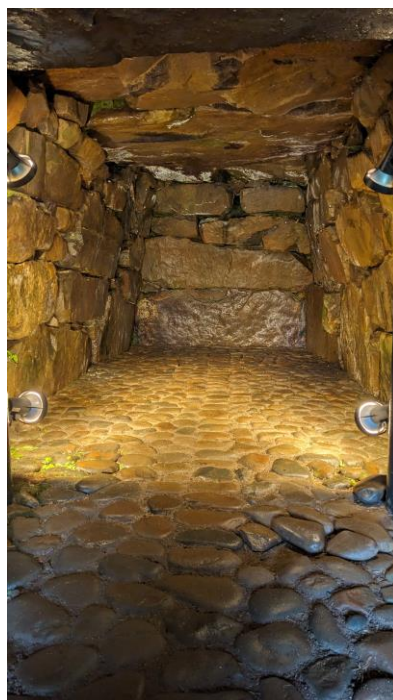
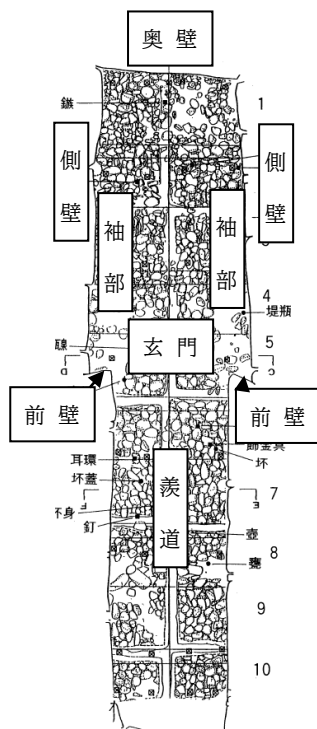
この横穴系埋葬施設を平面で見たとき、羨道（玄室への通路）と玄室が接合する部分（玄門）から左右に伸びる壁（前壁）とそこにつながる側面の壁（側壁）で形成する部分を袖部という。埋葬施設の平面形を、羨道側を脚部方向とした人間が着る上着に見立てた場合の袖にあたるという訳だが、この衣服を着た人はうつ伏せなのか？仰向けなのか？

うつ伏せであれば、玄門から奥壁（玄室の突き当たりの壁）を見て右側が右手の、左側が左手の袖、仰向けならばその逆ということになる。

では、研究者は左右をどのように呼び分けているのだろうか？

実は、これははっきりと定義づけられてはいない。

石室内に入るとき、大概の人は奥壁側に向かって入るので、その時の左右で「右袖」「左袖」を区別（つまり、うつ伏せ状態）すればいいという人もいれば、羨道側からは袖部は見えないのだから、奥壁側から羨道側を見たときの方向で区別すべき（つまり、仰向け状態）と主張する人もいる。



横穴系埋葬施設の各部名称（鬼の窟古墳石室平面） 鬼の窟古墳石室（玄門側から奥壁をみる） 鬼の窟古墳石室（奥壁側から玄門をみる）

このように、研究者によって左右の区別はまちまちなのが実情だ。

「どっちでも構わない」では済まないのである。

ならば、学術用語としてしっかり共通認識が持てるように定義づけすればいいじゃないかと
言われるかもしれないが、残念ながら、そんなめんどろな作業をやりたがる考古学者は、現状
存在しないのだ。

こういった事例は横穴系埋葬施設に限ったことではないので、「考古学」という学問が、非常にいい加減、よく言えば大らかな学問であることを示す一例といえるのかもしれない。

西都原を訪れ、4号地下式横穴墓や鬼の窟古墳を見学し、小難しい説明文を読むとき、この文章は実は非常にいい加減…いや、大らかな学問の結実なのだと思いますを巡らせば、構えず楽しく読むことができるのではないだろうか。 (和田 理啓)

河野一隆 2012「倭王権から倭国へー雄略朝の画期の評価を中心として」『講座日本の考古学』8 古墳時代 下, 青木書店

– 2 –